SUMMER WARS3 -僕らの夏の夢-

鉄コン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＳＵＭＭＥＲ　ＷＡＲＳ３　－僕らの夏の夢－

【Ｎコード】
Ｎ４７５９Ｐ

【作者名】
鉄コン

【あらすじ】
日常と非日常を繰り返した健二達。あの事件から早一年が経った。三人は希望の進路へ進み元通りの日常へ戻っていった。しかし、ある不穏な噂から健二達の日常は三度崩れる。小磯健二にとって戦争とは逃れられないものなのだろうか。

プロローグ（前書き）

初めての方もお久しぶりの方もこんにちは。鉄コンです。
この作品は前作のＳＵＭＭＥＲ　ＷＡＲＳ２－新たなる脅威－の続編になっていますのでこの作品を始めてみる方はまずそちらの方を見ることをお勧めします。そして、この作品は言わずもがなですがサマーウォーズの二次創作になっているので苦手な方は見るのを勧めません。このことを念頭においていただけたら幸いです。

前作では約１８万ＰＶユニークは２１５６２人（１２月現在）突破をさせもらいました。本当にありがとうございます。もし、また付き合ってもらえるのなら宜しくお願い致します。

プロローグ

「どうよ？そっちはもうそろそろなれたんじゃないの」

「まぁね。でも、流石に凄いよ東大は。授業かなり難しくて」

「えぇ～？健二君そう言ってるけど前にゼミの先生にすごく褒められてたじゃん。上級生より凄いって」

健二達の声である。どうやら近場の公園で集まって話しているようだ。先の夏希の言葉で健二は顔を少し赤くしている。

「そうゆう、佐久間はどう？ＯＺの養成学校じゃかなりの腕利きのエンジニアって聞いてるけど」

「どっから情報流れるのかね～。まぁ一応正式なオフィシャルエンジニアだからな。でも、俺以外にも腕利きの奴は結構いるぞ」

どういう事かと言うと、三人は無事に大学に合格。希望通りの進路へ行ったのである。健二と夏希は東大へ。佐久間はＯＺの養成学校へ入って実力を上げていた。

「佐久間君、侘助おじさんと連絡取ってるんでしょ？元気だった」

「ええ。元気そうでしたよ。でも、流石コアエンジニアと言うべきか相変わらず忙しそうにしてましたけど」

三人の仲は変わらず良い関係になっているようだ。一年前、二年前の事件後も変わらず。無論健二と夏希の恋仲も。

◇

同時刻

「ったく。一体何の冗談だこれは？」

侘助だ。どうやら何かの作業をしていたらしい。

「都合よく見つからずすぐ消去できたからいいが、どういうことだこれは？」

メッセージボードに何か書いてありそれを消去したようだ。それにはこう書いてあった。

『ねぇねぇ知ってる？ラブマシーンが生きてるって噂』

再び聞こえてくるは戦争の前歌

第一章

今の時期は夏。また夏が来たのだ。とても平和である。

「う～ん。どうしようレポートの題材」

健二は出された課題と格闘していた。

「あ、健二先輩。ここでしたかこんにちは」

「こんにちは。岩鉄君」

健二に話しかけてきたのは一木　岩鉄。健二と同じ一年生である。

「岩鉄って面倒ですから鉄で良いですよ。寧ろ皆そっちのほうで呼んでますし」

「鉄君の方もその『先輩』ってやめてよ同学年なんだし」

「ん～～でもどうも年上の人にはこれつけなきゃ呼びづらくて」

同学年しかも遅生まれでもないのに年上とはどういうことかというと、この岩鉄二年前の事件と一年前の事件の時アメリカにいてそこで知ったのだ。そして、健二と一緒に学びたいという希望で日本に来たのである。向こうではすでに１７歳の時点で高校のカリキュラムを終わらせているのでここに入れた。だから年上で『先輩』なのである。健二はどうにもこうにもこの呼び方には慣れないようだが頑なに受け入れてもらえず今に至るのである。

「それで、先輩もレポートの題材で困ってたんですか？」
「うん。まだ入ってから少ししか経ってないからどうにも苦手で……っと」
ポケットに入っていた携帯がなっている。どうやら相手は夏希のようだ。
「夏希先輩ですか？あ、そういえばもうそろそろ夏休みですし長野の陣内家の所へですかね？」
案の定内容はピタリと当てはまっていた。
「うん、そうみたい。それじゃそろそろ僕はここで」
「お疲れ様です」
健二がその場から離れて行った頃に岩鉄の方も携帯が鳴っていた。
「はい、もしもし。おうお前か。で、どうなったんや例の件は？……OK順調なんやねじゃこっちもそろそろ準備しますか」
◇
―ｌｏｇ　ｉｎ―
「お久しぶりです。侘助さん」
ドットサルのアバターサクマが侘助とテレビ電話で会話をしている。

「どうしたんだ？随分慌てている様子のメールを出して」

「え、ええ。まずこれを見てもらえませんか」

「！？」

出したのはＢＢＳのデータだった。だがその文面は以前侘助が切り取った文面と全く同じ事が書いてあったのだ。

「こ、これどうしたんだ？佐久間君」

その声には誰もがわかるような焦りが見えていた。

「僕が授業終わった頃にいつも行く書き込みのサイトに行ったんです。そこで、これを見つけたんです。幸いと言うべきか偶然にもその場には誰も入場してなかったんで即座に処理できたんですが他の人に見つかってたら……」

「……そうか。ありがとう」

そして、侘助は黙って先日切り取ったデータを見せた。

「……侘助さんもですか」

「まあな。佐久間君。夏希や健二君にも言ったか？」

「いえ、正直言えませんでした」

「そうか。真偽を確かめに行こう。この書き込みを書いた張本人に」

第一章（後書き）

はい、こんにちは鉄コンです。今回先に言ってしまいますとオリジナルキャラクターが今回出てきた岩鉄を含め３人います。そして、名前からもうお気づきだと思いますがこのキャラクターは僕をモデルにしています。実際には僕はこんなに勉強は出来ませんよー先にいておきますが。どうしても無茶な設定が何個かあるのですがそこは見逃してやってください。この岩鉄は僕の憧れとかが混ざって出来上がったキャラクターなので先の通りやや無理が出てきてしまうのが現状です。それでも楽しんでもらえるように頑張ります。

番外編　クリスマス

「本当に来ないの？」

「ああ、課題が山積みでね。水を差すのも悪いし二人で楽しんで来いよ」

「ありがとう。佐久間」

「しっかし、前までは考えられなかったな～お前が彼女つれてクリスマスの夜を過ごすなんて」

それを聞いてすぐに顔が赤くなった。無理も無いことである。

「それじゃ、頑張れよ」

piと電話が切れた。今の健二は確かに嬉しいのだが緊張しっぱなしで少し危ない状態である。

「健二君！こっちこっち」

去年は夏希が受験で忙しかったためこんな風にいけなかったが。今年は楽しめそうである。

「じゃあ行こう健二君」

「は、はい！」

と意気込んだは良いものの健二は恋愛関係は疎いためこんな日には何処に行ったら良いのか全く分からずである。だがそこは流石女子と言うべきか夏希はちゃんと行くところを予定していたようである。そして、数十分後着いたところは

「海岸ですか？」

「そう。海岸」

一見は何の変哲もない工場が周りにあるだけの場所だが、夜だと……

「あ、とても綺麗です」

そう、工場のライトが反射して鮮やかになるのだ。工場と運河一見あわない組み合わせのように思えるが夜になると健二の言ったとおりとても綺麗になる。

「どうやって知ったんです？ここ」

「前にね友達が連れてきてくれたの。それで、本当に綺麗だったから。いつか好きになった人といっしょにこれたらなぁって」

その言葉を聞いて嬉しさと恥ずかしさで一杯になった。

「あ、ありがとうございます」

完全にガチガチになっている。無理もない。好きになった相手が自分だと再確認させられたのだから。

「ううん。礼なんていいの。私は健二君と一緒にいれるだけで嬉しいから」

そういって思いっきり健二に抱きついた。こんな事されれば危ない状況にある健二はどうなるかと言うと……

「あれ？健二君！健二君！」

無論卒倒だった。

◇

一時間後

「あ、健二君起きた！？」

起きた健二の目に映ったのは周りの景色と夏希だった。そして、良く見ると……

「すすす、すいません！」

膝枕されていた。

「だ、大丈夫？健二君」

「いや、大丈夫です。本当に！」

良かったと一息つく夏希。現在地はどうやらビルの屋上のようだ。

「夏希先輩もしかしてここ」

「そう、去年の花火のとき来たビルの屋上。それより下を見てみて」
言われるままに下の街並みを見ると、そこにはツリーや看板に掛けられたイルミネーションでこうこうと街が輝いていた。
「海岸と違った綺麗さですね」
「気に入ってくれた？良かった」
しばらく2人はこうこうと輝く街並みを見ていた。
「そうだ。夏希先輩これ」
「これって……」
「プ、プレゼントです」
中身は手袋だった。
「寒そうにしてたんでサイズ合いますか？」
「うん。ぴったり。ありがとう大切にするね」
健二は気付いていなかったがプレゼントを出した時夏希は少し嬉し泣きしていた。
「健二君、プレゼントもらってお願するのも少し悪いんだけど」
「僕の出来ることなら何でも良いですよ」

「もう少しこっちに来て」

健二は夏希に少しづつ歩み寄って行く。夏希の息が届く距離まで健二が近づいたら夏希は健二の口を塞いだ。

「な、夏希先輩！？」

「プレゼントの変わりといったら何だけど私が今出来るのはこれだから」

また、頭が沸騰しそうになっていた。その夏希の笑顔は健二にとって最高のプレゼントになっていた。

番外編　クリスマス（後書き）

こんにちは鉄コンです。どうでしたでしょうか。もう一日すぎてんじゃんとかまだ二話しか書いてないのに番外編とか突っ込みたいことは多々あると思うんですが広い心で見てやってください。やっぱり2人の関係としてどうしてもクリスマスのイベントは書いておきたかったんですが僕はどうにもこうにも恋愛関係を書くのが苦手なんですよね。なら書かなきゃいいって話なんですけど。って言ってること矛盾してますね（苦笑）では

第二章（前書き）

こんばんは。鉄コンです。ま、まさか大晦日、正月とで間は空くと思ってたんですけどこんなに空くとは思っていませんでした。すいません。

夏希「少し、計画性が無いと思うけど……」

佐久間「無能だな、無能」

健二「すいません。フォローできないですよ」

鉄コン「いじめだーーーー（泣）」

第二章

pipipipipipi

「もしもし？ん、お前か……そうか、侘助さんと佐久間さんがあっちのＯＺのホームに着いたか。だったらそろそろ健二先輩と夏希先輩にも情報がいきわたるはずだがな。プロテクトはできてるな？……よしほんじゃ任せたぞ」

◇

「これが例の二つのメッセージを書いたＯＺのホームみたいですね」

「ああ、でも何かしらの仕掛けがあると思って良いだろうな。それじゃ行くぞ」

２人はゴクリと生唾を飲んでのどを鳴らした。

「これは……」

「見たところプロテクトですねＯＺのキーでも入れない」

「しかも、暗号は何百桁の暗号と来ている。参ったな……」

暗号解読のソフトを使おうにも時間がかかりすぎる。自分達では当然解けるわけも無い。少しの間２人は悩んでいたが二人はすぐに同じ答えにたどり着いた。

「……やっぱり、健二ですかね」

「解く方法はそれしかないだろうな。だが……」

そう、二年も彼は戦争に巻き込まれてきたのだ。しかも、最初の戦争は自分のせいで。頼もうとしたら彼の性格上最後まで付き合うのが小磯健二である。

「侘助さん。……話しましょう健二に」

「佐久間君……。だが」

「俺や健二はいいんですよ。どうせ健二の事だ。最後まで付き合うお節介な奴ですよあいつは。そして、この俺もね」

「……すまない」

侘助は健二に今までのことを話す決心をした。そして、必ず自分が後始末をつける決意もこの瞬間したのだった。

ーｌｏｇ　ｏｕｔー

「それでは、今日の講義を終了する。皆、お疲れ様」

講義が終わってくたびれている生徒がほとんどである。だが、健二にとっては数学の講義ならば全く苦にならないようで他の生徒と比べると一目瞭然でケロッとしている。

「健二～お前はどうしてそんなに元気なんだよ～俺もうくたくただぞ」

「そうかな？僕も結構講義で疲れてるけど」
言ってる事と本人が示している様子が全くの逆である。級友からは羨ましい目で見られていた。
ｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉ
「ん？メール。誰からかな？佐久間か、どうしたんだろう」
学校の講義終わったらすぐに夏希さん連れて養成学校来い。メールにはそう書いてあった。
健二は、とりあえず指示のままに夏希を呼びにいく。

「どうしたの？健二君」
「いえ佐久間に来るように言われて」
「そう。分かった行こう」

◇

「来たか、健二」
「佐久間どうしたの珍しく慌てた感じのメール出して……って、わ、侘助さん！？」
「よう。２人とも久しぶりだな」
「侘助おじさん！？どうしてここに？いつ帰ってたの」

「佐久間、これはどういう……」

「説明は後。これを頼む」

差し出したのは先のプロテクトの暗号である。ＯＺの暗号を解いた健二にとって苦も無く解けるレベルである。

「わ、分かった」

第三章

「……」

「そ、それって……」

佐久間と侘助から今までのいきさつが話された。当然と言えば当然の反応だ。二年前の事件で倒し尚且つ一年前の事件でＯＺ内で残ったデータも１バイト残らず回収したのだから。

「で、でも一年前の事件でバルトが残したデータと言うことは無いの？」

「それも無いですよ。夏希さん」

そう。バルトはボルトの協力によって一切残らず排除されたのだ。もし残っていたとしてもすでに消えているからだ。ラヴマシーン、バルトこの二体の二度による襲撃によりＯＺはセキュリティの更なる強化を余儀なくされた。そこで健二たちや上の決定によりセキュリティではなくＯＺそのものを変えることになった。つまり、今まで存在していたＯＺを消去し新たなるＯＺを作ったのだ。この新たなるＯＺには健二の立ち上げた暗号、更には侘助や佐久間トップレベルのプログラマーを集めウィルス、バグの類を一切作らずにすむようになっている。だからこそ、今のＯＺにはラヴマシーンのデータもバルトのデータも残っていないのだ。

「とにかく、確かめましょう。もう少しでプロテクトが解けます」

そう言った矢先にピーーーンとロックが解けた電子音がなった。

「それでは、行きます」

四人は息を呑み顔を見合わせ頷く。健二が恐る恐るエンターキーを押した。その瞬間

パーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーン！！！

「うわっ！！」

派手なクラッカーの音と色とりどりの紙吹雪が散らばり画像が出てきた。

そこには『ごくろーさんw』と相手を馬鹿にしたようなふざけたメッセージがあった。

「……」

四人は音が出たときに完全に驚いていた。健二にいたっては椅子から転げ落ち尻餅をついていた。

その後、メッセージを見て五分間ほどの放心状態に陥っていた。

「な、なんなんだよ……」

ようやく口を開けた佐久間が発した言葉がそれだった。無理も無いことであるが。

「と、とりあえずこの件は後にする。ホームの中はまた、明日調べることにしよう。悪かったな二人とも呼び出して」

「い、いえ」

「う、うん。それじゃ佐久間君、侘助おじさんまたね」

気力が一気に抜け落ちたような顔と状態でそれぞれ帰っていった。だが、健二の顔は他の三人とは違って気力が抜けたと言うよりかはまだ何かが引っかかっているような顔である。

そう、二年前彼はあの夜にＯＺの暗号を解こうとしたことによりラヴマシーンの暴走を手助けしてしまったのだ。引っかかるのは当たり前のことだ。そして、その引っかかりはぴったりと当たることになる。

◇

「……で、どうだった？」

「どうにもこうにも、岩鉄お前が目をつけるだけあるよ。お前が思ったとおり今までより格段に計算が速くなってる」

「やっぱりね。さすが健二先輩」

「でも、あの仕掛けが出た後のあの反応は正直心配になるぞ。大丈夫かと思ったくらいだ」

「わはははは！！それはしゃーないわ。俺らでもいきなりあんな仕掛けされたら驚くよ。ま、それは置いといて次は拓海の番だが、あいつの方は準備でできてんのか？」

「当たり前だ。だとよ」

「OKだ。じゃ次行ってみますか」

第四章

昨日の事を引きずりながら学校に来た健二。昼食時の時の顔はあからさまにボーっとしながら食べていた。普段なら次の授業の予定などをちゃんと考えながら食べているのだがそんなことなど考えられるはずも無かった。

「……先輩、……二先輩！、健二先輩！！」

「は、はい！！」

素っ頓狂な声を出して返事をしたため一瞬周りから少し冷ややかな目で見られてしまった。

「どうしたんですか？今日なんか先輩変ですよ。お得意の数学の講義でもボケーっとしていて様子があきらかに普通とは違ってますよ」

「い、いや何でもないよ」

「そうですか？無理しないでくださいよＯＺの方でもオフィシャルの仕事もあると思いますが」

「うん。分かってるよ」

「まぁ最近、空のホームにプロテクト掛けてそれといた後にビックリメールを出すとか質の悪い悪戯とかもありますからね。オフィシャルでもウンザリしているらしいですけど」

「！？」

健二はすぐに反応した。まさに自分に起きた体験をそのままピタリと当てていたからだ。さらにそんな悪戯はほとんど起こらないのにもかかわらず岩鉄はピタリと言い当てたのだ。

「が、岩鉄君……」

「ん？どうしたんですか？」

「い、いや何でもないよ？」

そんなはずはないとすぐに健二は否定した。機能のことは四人以外の誰も知らない。ましてや、情報も何も教えてもいない岩鉄が知るはずも無いのだから。

「あ、健二先輩時間なんでそろそろ行きます」

「うん。それじゃまた」

岩鉄は会話を終えた後少し呟いていた。

「健二先輩。あんたは少し人を疑うことを知るべきだ。……でも、まぁそれだから陣内家は夏希先輩はあなたについていったんですね」

◇

健二は結局この日の講義は全く頭に入らずだった。本当にラブマシーンが復活するならただごとじゃすまなくなる。だが、今は判断材料が情報が全く無いのだ。小さい情報でも欲しかったが当然得られるわけも無かった。

「ただいま」

健二はその疲れた足取りで家に飼った。そして、すぐにＯＺにｌｏｇ ｉｎした。今日は、と言うよりいつもだが大学が終わったら夏希に会っているのだ。

―ｌｏｇ ｉｎ―

「夏希先輩」

「あ、こっちこっち健二君」

「どうでした？何か情報はありましたか？」

「ううん。やっぱり何も無い。佐久間君とおじさんからの知らせを待つしかないみたい」

ｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉ

そんな会話をしている途中に突然にメールが来た。

「あ、すいません。夏希先輩メールが」

「あ、私も」

しかも２人同時に来ていた。

「……け、健二君これ」

「は、はい」

2人がたじろいでいる。理由は簡単だった。メールの件名が『情報が欲しいか？』だからだ。さらに中身は2人にＯＺでも全くと言っていいほどアバターが来ない放置されたエリアに来いと言うのだ。

「……」

行くか決めあぐねている様子だ。無理も無い。解釈を変えればこれは脅迫文にもなりかねないメールなのだから。決めあぐねるなと言うのが無理な相談である。だが……

「行きましょう。夏希先輩」

迷いをすぐに振り切ったような顔だった。どんなに小さくても前進したい気持ちで今は一杯なのだ。

「分かった。行こう健二君」

夏希も覚悟を決め指定されたエリアへジャンプする。【捨てられたエリア】と呼ばれる場所へ。

第五章（前書き）

こんばんは。鉄コンです。すいません。相変わらずな遅さで（汗）実はとうに埋まっていたんですが書く時間が無くて……。そのお詫びと言ってはなんですが今回は気合の二話連続投稿です。これで勘弁してやってください。

第五章

「ここが招待されたエリアみたいね」

「でも……何もありませんね」

健二達の言うとおりそこには何も無く閑散としていた。通常ＯＺのどのコミュニティサイトにもどんな小さいエリアにもちょっとしたアプリケーション又はゲームの一つはあるものだがここには全く何も無かった。

＜カズマさんが入場します＞

不意にアナウンスの声が流れカズマもこのエリアに入る。

「カ、カズマ君！？な、何でここに？」

「健二さん。夏希姉ちゃん。多分２人と同じだと思うよ」

「じゃあカズマ君も……」

そう、カズマも招待状が届いていた。ラブマシーン復活とこのエリアへの移動を情報をエサに誘われたのだ。

カツン

「！！」

足音がエリア全体に響き渡る。

「ようこそ。捨てられたエリア、否隠(ハイドン)されたエリアへ。殿堂入りした御三方、それともサマーウォーズを戦い抜いた英雄と言ったほうがいいですかね？」

ローブを着て全身を隠したやや小さめのアバターが影から出てきた。

「あなた誰なの？」

「あなた達三人を招待した者達です。それ以外に何かありますか？」

少し軽い物言いで話す。

「者達？」

「はい『達』です」

「健二さん。奥を良く見て」

カズマに言われるまま招待されたアバターの横隣を見ると左右から新たに二体のアバターがゆっくりと現れた。この二体も姿を隠すためかローブを着ている。

「それで、健二さんと夏希姉ちゃんそして僕を呼んだ理由は？」

「何、簡単なことです。僕らと勝負をしてもらいたいだけです」

「勝負？何で？」

「あなた方の得意分野でです」

そういい終え指慣らしをする。その瞬間に何も無かったエリアに一気に三つのフィールドが出現した。

「あなた達の目的は一体なんですか！？情報を持っているんですか！！」

健二は強く問い詰めるが……

「そう慌てなくても、終われば分かりますよ」

受け流され、三人は案内されるままにそれぞれのフィールドへ踏み込む。

三人が入る前に招待したアバターとその仲間のアバターは耳打ちを少しの間していた。

（……おい）

（ん？）

（どう動けばいい？）

（自由で良いぞ）

（加減は無しで良いんだな？）

（無論だ。したらこっちがやられる。全力で行け！）

第六章

カズマ　ｓｉｄｅ

「……」

「何も無いステージ。闘技台ステージか」

「そう。キングあんたと戦う相手はステージのギミックを利用して勝とうとする奴が多いが、俺は真剣に一対一（サシ）でやる時はそうゆうのは嫌いでね」

「僕とまともにやりあって勝てると言いたいの」

「いや、どっちでもない」

冷静に会話を続けながら二人はｒｅａｄｙと書かれた丸の陣へそれぞれ入っていく。

「それよりアンタローブとりなよ。真剣勝負なんでしょ」

「おっと、これは失礼しました」

そう言いローブを脱ぎ捨て出て来たアバターは……カズマのような動物を直立二足歩行の人型タイプにしたアバターでモデルは狼だった。特に何の変哲もないアバターだが、その姿にカズマは驚愕している。

「な、何でアンタが……」

「ん？俺のことを知ってんのかい？」

「ああ。ＯＭＣ初代チャンピオン　タクミ！」

「知ってもらえて光栄だね。三代目にして現チャンピオン　カズマ！」

◇

ナツキ　ｓｉｄｅ

「……」

「……」

両者は無言のままステージに入る。

「どうぞ、その丸い陣へ」

最初に口を開いたのは夏希の相手をするアバターの方だった。夏希はその言葉に反応しようとしない。

「ハハ、安心してくださいよ。ウィルスやトラップなんて設置しちゃいないですから」

「あなた結構な勝負師でしょ」

「え？」

いきなりの切り出しに少し面食らっていた。

「雰囲気で分かる。栄おばあちゃん侘助おじさんみたいな勝負師の雰囲気があるから」

「……参ったな～。でも、少し買いかぶり過ぎですよ。僕はただの花札好きの者です」

両者が陣につきルールのアナウンスが流れる。そしてゲーム開始と共に夏希は吉祥天の姿になる。

「へぇ、それが噂の吉祥天のレアアイテムですか」

夏希の相手をするアバターはローブを脱いだ。その中から出てきたのは緑の髪をしたふとがたのアバターで黒の道着を来た現実にもいるようなアバターだった。

「そっちが吉祥天なら……」

「！？」

その瞬間周りを全て飲み込むようなそして全て圧倒するような。空気いや緊張感が流れた。その原因は緑髪のアバターの変化からきていたものだった。

「そっちが吉祥天ならこっちは黒闇天です」

◇

健二　ｓｉｄｅ

「ここが僕らのステージですか？」

「ええ、そうですよ」

他の２人と違って専用のステージでもなんでもない。数学の勝負だから当たり前だが普通のＯＺの一景色である。

「まぁ、僕らのステージもルールは簡単です。数百桁の数学の暗号を僕より早く解けばいいだけです。
１０問やって六問先取した方が勝ちです」

「でもあなたがすでに問題を知っている『それなら大丈夫です』とはかぎ……」

「これですから」

そう言い目の前に使うアプリケーションを出す。

「これは……」

「そうです。公式に使われてる物なのでその問題も無いです」

「確かにこれは配信されている。なら……」

「そう言うことです」

アプリケーションが起動され２人は準備を始める。そして開始のカ

ウントダウンが数えられる。

3

2

1

go！

第七章

現在６問を解き終わっていた。ケンジと招待者のポイントは３－３となっている。ケンジと招待者はお互いに相手の解くスピードに驚いていた。

（こ、こんなに速い人がいるなんて。数学オリンピックの人よりも速い）

（話にも聞いていたし分かってはいたが、本当に速い）

七問目

「っく！」

「っこの！」

七問目を先にといたのはケンジのほうだったが

八問目

「くーーーー！」

招待者も負けじと速く解く。結局九問目に突入する前のスコアは４－４と同点だった。だが、この九問目を先に解くのと解かないのでは大きな差が出る。解いたほうは相手に重圧をかけられるからだ。

計算をするには冷静さが命となる。重圧と緊張がでればまともに解けるのは困難となるからだ。２人はペンを手に汗をたらす。

go！

開始の合図と共に食い入る様に一気に解いていく。もう2人とも常人のレベルを遥かに超えている速さだ。二分半が経ち回答が出た。先に解いたのは……招待者だった。
絶体絶命の状態のケンジ。だがそんなことはお構いなしに最後の十問目が出る。

「これで、決着を付けさせてもらいますよ！」

go！

一気に招待者は解いて行く。だが、それに対してケンジは何故か出された問題を見ているだけである。
……いや、違った。もうすでにキーボードに手をつけて打ち込んでいた。あの時のように数字の海に飛び込んでいた。

「ま、まさか暗算！？い、いやそんなバカな事が！」

そういっている間に最後の一文字を打ち込みエンターキーを押して正解していた。問題が出されてからわずか３０秒のことだった。

「……」

招待者は呆気に取られていた。解いた当の本人であるケンジも意識を集中させすぎたせいか気絶寸前である。

「……僕らの勝負は引き分けですか」
2人の勝負が終わった瞬間に佳主馬と夏希の勝負も終わったらしく元のエリアに2人ともいた。だが、少々2人の様子がおかしい。
「夏希さん！佳主馬君！大丈夫！？」
カズマはボロボロになり、ナツキもその場にへたり込んでいた。
「よう、勝ったのかお前ら？」
「まぁね」
「お前だけだぞ勝たなかったの！」
ケンジは2人の姿を見て驚愕していた。正体不明の相手とはいえ2人が負けるのは考えられないからだ
「一体あなた達は何者なんですか！」
「……終わったら言うって約束でしたしね。簡単なことです情報提供と実力を見るためですよ」
「情報提供、実力を見る？」
「そうです。ラブマシーンとまた戦えるかどうかをね」
「なっ！！」
「奴は生きていたんです。こんな風に打ち捨てられた様なエリアに

逃げ隠れしながら力を蓄えてね。そして、いつかあなた達に復讐するために。さらにそれだけじゃない。奴はプログラムがもつはずの無い【何か】を手に入れた。それを知らせるために呼んだんです」

突きつけられた事実はあまりにも重過ぎ唐突すぎた。

「まだ、僕の問いに答えてないですよ。あなた達は何者なんです」

「それも、後ちょっとで嫌でも分かります。ではまた明日会いましょう」

三体のアバターはそう言いｌｏｇ　ｏｕｔし立ち去った。

ｌｏｇ　ｏｕｔ－

第八章

翌日

◇

「昨日の三人は結局何者だったんだろう……」

昨日の疲労が酷いせいか健二は大学を休んでいた。それ以上に残していった言葉がのしかかって響いていた。

『奴はプログラムが持つはずの無い【何かを】手に入れた』

「僕はラブマシーンと戦うのは覚悟の上だ。でもその何かって何なんだ……？」

pipipi

考え事に水を差すように電子音が鳴る。岩鉄からのメールだった。『今日会いませんか？』との事だった。このまま寝てても仕様がないと気分転換にと重い腰を上げて集合場所に行く

◇

「あ、健二さんこんにち……おわっ！」

「な、何どうかした岩鉄君？」

「どうしたもこうしたも無いですよ！何ですかその目の下の隈！」

「え……？」

言われるままに鏡を見てみると。指差されたとおり目の下は酷く黒くなっていた。だが……

「でも岩鉄君も結構黒いけど大丈夫？」

「へ……あら！？」

同じように鏡を見ると健二ほどではないが確かに目の下が黒くなっていた。

「ま、まぁ大丈夫ですよ。とりあえず入って座りましょう」

絶対大丈夫じゃない！健二は内心そう思っていた。無理も無いなんてったって足取りがふらついていたのだから。誤魔化し切れていないのに岩鉄は強引に誤魔化し喫茶店の中に入っていく。

「すいません。疲れているのに無理に呼んで」

申し訳ないとばかりに頭を下げる。

「い、いや気にしないで僕も行くところが今日無かったし」

「そう言ってもらえると助かります。また明日会いましょうって言いましたしね。できれば今日が良かったんですよ」

「ん？昨日そんな事言ったっけ？」

「はい。ＯＺで」

『また明日会いましょう』健二は昨日の招待者の言葉が頭に一気に響いた。

「それは……いつ言ったの」

動揺で震える声を隠すのが一杯一杯になっていた。

「１０時ごろだったかなぁ」

そのときのセリフも１０時頃だった。健二は言おう言おうと思っている事を言おうとするが緊張と動揺で言えなかった。

「健二さん。あなたは少し人を疑うという事をした方が良い」

その言葉は自分が招待者だと暗に示していた。

カランカラン

健二たちと同年代くらいの2人の男が席に近づいてくる。

「お前ら遅いわ」

「悪い悪いちょっとこんでて」

「で、その人が小磯健二さん？」

「ああ、そうだ」

岩鉄は2人を隣に座らせて健二の目を見る。

「さてと、身構えなくても大丈夫ですよ。今日はちゃんと話をしに来たんですから」

健二はゴクリと喉を鳴らしてしっかりと岩鉄と向かい合う。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4759p/

SUMMER WARS3 -僕らの夏の夢-

2011年3月14日19時11分発行